

# 新尼御前御返事

文永一二年二月一六日 五四歳

あまのり一ふくろ送り給び了んぬ。又大尼御前よりあまのり畏まり入って候。

此の所をば身延の岳と申す。駿河の国は南にあたりたり。彼の国の浮島がはらの海ぎはより、此の甲斐国波木井郷身延の嶺へは百余里に及ぶ。余の道千里よりもわづらはし。富士河と申す日本第一のはやき河、北より南へ流れたり。此の河は東西は高山なり。谷深く、左右は大石にして高き屏風を立て並べたるがごとくなり。河の水は筒の中に強兵が矢を射出したるがごとし。此の河の左右の岸をつたい、或は河を渡り、或時は河はやく石多ければ、舟破れて微塵となる。かゝる所をすぎゆきて、身延の嶺と申す大山あり。東は天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺なり。高き屏風を四つついたてたるがごとし。峰に上りてみれば草木森々たり。谷に下りてたづぬれば大石連々たり。大狼の音山に充満し、猿猴のなき谷にひゞき、鹿のつまをこうる音あはれしく、蝉のひゞきかまびすし。春の花は夏にさき、秋の葉は冬になる。たまたま見るものは、やまがたがたき木をひろうすがた、時々とぶらう人は昔なれし同朋なり。彼の商山の四皓が世を脱れし心地、竹林の七賢が跡を隠せし山もかくやありけむ。峰に上りてわかめやをいたると見候へば、さにてはなくしてわらびのみ並び立ちたり。谷に下りてあまのりやをいたると尋ぬれば、あやまりてやみるらん、せりのみしげりふしたり。古郷の事はるかに思ひわすれて候ひつるに、今此のあまのりを見候ひて、よしなき心をもひいでてうくつらし。かたうみ・いちかは・こみなとの磯のほとりにて昔見しあまのりなり。色形あぢわひもかはらず、など我が父母かはらせ給ひけんと、かたちがへなるうらめしさ、なみだをさへがたし。

此はさてとゞめ候ひぬ。但大尼御前の御本尊の御事、おほせつかはされておもひわづらひて候。其の故は此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候ひしあまたの三蔵、漢土より月氏へ入り候ひし人々の中にもしるしをかせ給わず。西域等の書ども開き見候へば、五天竺の諸国寺々の本尊皆しるし尽くして渡す。又漢土より日本に渡る聖人、日域より漢土へ入りし賢者等のしるされて候寺々の御本尊皆かんがへ尽くし、日本国最初の寺元興寺・四天王寺等の無量の寺々の日記、日本紀と申すふみより始めて多くの日記にのこりなく註して候へば、其の寺々の御本尊又かくれなし。其の中に此の本尊はあへてましまさず。

人疑って云はく、経論になきか、なければこそそこばくの賢者等は画像にかき奉り、

木像にもつくりたてまつらざるらめと云云。而れども經文は眼前なり。御不審の人々は經文の有無をこそ尋ぬべけれ。前代につくりかゝぬを難ぜんとをもうは僻案なり。例せば釈迦仏は悲母孝養のために切利天に隠れさせ給ひたりしをば、一閻浮提の一切の諸人しる事なし。但目連尊者一人此をしれり。此又仏の御力なりと云云。仏法は眼前なれども機なければ顯はれず。時いたらざればひろまらざる事法爾の道理なり。例せば大海の潮の時に随って増減し、上天の月の上下にみちかくるがごとし。

今此の御本尊は教主釈尊五百塵点劫より心中にをさめさせ給ひて、世に出現せさせ給ひても四十余年、其の後又法華經の中にも迹門はせずぎて、宝塔品より事をこりて寿量品に説き顯はし、神力品囑累品に事極まりて候ひしが、金色世界の文殊師利、兜史多天宮の弥勒菩薩、補陀落山の觀世音、日月淨明德仏の御弟子の薬王菩薩等の諸大士、我も我もと望み給ひしかども叶はず。是等は智慧いみじく、才学ある人々とはひゞけども、いまだ日あさし、学も始めたり、末代の難忍びがたかるべし。我五百塵点劫より大地の底にかくしをきたる眞の弟子あり、此にゆづるべしとて、上行菩薩等を涌出品に召し出ださせ給ひて、法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字をゆづらせ給ひて、あなかしこあなかしこ、我が滅度の後正法一千年、像法一千年に弘通すべからず。末法の始めに謗法の法師一閻浮提に充満して、諸天いかりをなし、彗星は一天にわたらせ、大地は大波のごとくをどらむ。大旱魃・大火・大水・大風・大疫病・大飢饉・大兵乱等の無量の大災難並びをこり、一閻浮提の人々各々甲冑をきて弓杖を手ににぎらむ時、諸仏・諸菩薩・諸大善神等の御力の及ばせ給はざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮つること雨のごとくしげからん時、此の五字の大曼荼羅を身に帯し心に存せば、諸王は国を扶け万民は難をのがれん。乃至後生の大火災を脱るべしと仏記しをかせ給ひぬ。而るに日蓮上行菩薩にはあらねども、ほゞ兼ねてこれをしれるは、彼の菩薩の御計らひかと存じて此の二十余年が間此を申す。此の法門弘通せんには「如来現在猶多怨嫉況滅度後」「一切世間多怨難信」と申して、第一のかたきは国主並びに郡郷等の地頭・領家・万民等なり。此又第二第三の僧侶がうったへについて、行者を或は悪口し、或は罵詈訕し、或は刀杖等云云。

而るを安房国東条郷は辺国なれども日本国の中心のごとし。其の故は天照太神跡を垂れ給へり。昔は伊勢国に跡を垂れさせ給ひてこそありしかども、国王は八幡・加茂等を御帰依深くありて、天照太神の御帰依浅かりしかば、太神暎りおぼせし時、源右將軍と申せし人、御起請の文をもってあをか会加の小大夫に仰せつけて頂戴し、伊勢の外宮にしの

びをさめしかば、太神の御心に叶はせ給ひけるかの故に、日本を手のにぎる將軍となり給ひぬ。此の人東条郡を天照太神の御栖おんすみがと定めさせ給ふ。されば此の太神は伊勢の国にはをはしまさず、安房国東条の郡にすませ給ふか。例せば八幡大菩薩は昔は西府御座にをはせしかども、中比なかごろは山城国男山に移り給ひ、今は相州鎌倉鶴が岡すに栖み給ふ。これもかくのごとし。

日蓮は一閻浮提の内、日本国安房国東条郡に始めて此の正法を弘通し始めたり。随つて地頭敵かたきとなる。彼の者すでに半分ほろびて今半分あり。領家はいつわり癡をろかにて、或時は信じ或時はやぶる。不定なりしが日蓮御勘氣こうむを蒙りし時すでに法華經をすて給ひき。日蓮先より見参げざんのついでごと見参に難信難解と申せしはこれなり。日蓮が重恩の人なればたす扶けたてまつらんために、此の御本尊をわたし奉るならば、十羅刹定じゅうらせつんで偏頗へんぱの法師ほっしとをぼしめされなん。又經文のごとく不信の人にわたしまいらせずば、日蓮偏頗はなけれども、尼御前我が身の咎がをばしらせ給はずして恨うらみさせ給はんずらん。此の由をすけのあじりば委細に助阿闍梨の文にかきて候ぞ。召して尼御前の見参に入れさせ給ふべく候。

御事にをいては御一味なるやうなれども御信心は色あらわれて候。さどの国と申し、此の国と申し、度々の御志ありてたゆむけしきはみへさせ給はねば、御本尊はわたしまいらせて候なり。それも終にはいかんがとをそれ思ふ事、薄氷うすらいをふみ太刀たちに向かふがごとし。くはしくは又々申すべく候。それのみならず、かまくらにも御勘氣の時、千が九百九十九人は墮ちて候人々も、いまは世間和やわらぎ候かのゆへに、くゆる人々も候と申すに候へども、此はそれには似るべくもなく、いかに不ふびんには思ひまいらせ候へども、骨に肉を替ばかへぬ事にて候へば、法華經に相違せさせ給ひ候はん事を叶ふまじき由、いつまでも申し候べく候。恐々謹言。

二月十六日

日蓮花押

新尼御前御返事